

熊野地方・古座川流域における ニホンミツバチ伝統的養蜂の現状

揚妻 直樹^{1*}, 岸田 治¹, 油田 照秋², 揚妻-柳原 芳美³

Present Situation of Traditional Apiculture (Beekeeping) in the Kozagawa Basin, in
the Kumano Region of Japan

by

AGETSUMA Naoki^{1*}, KISHIDA Osamu¹, YUTA Teruaki²,
AGETSUMA-YANAGIHARA Yoshimi³

要 旨

熊野地方・古座川源流部に位置する松根地域と平井地域、中流域に位置する明神地域と直見地域において戸別訪問し、伝統的なニホンミツバチ養蜂に関する聞き取りを行った。その結果、かつてはどの地域でも 7~8 割の家でゴーラ（伝統的養蜂に用いられる人工巣）を持っていたが、現在はゴーラ所有率が低下しており、とくに中流域で低下の度合いが大きかった。ゴーラ所有率は、自然に関わる職業に従事している家で高かった。ゴーラ所有者が養蜂を始めたきっかけは、家族や周囲の人々の影響、ゴーラを知人からもらったため、など社会的要因が多かった。現在も養蜂を続けている理由は単に蜂蜜採取のためというよりも、趣味と考えている場合が大半であった。一方、ゴーラ非所有者が養蜂しない理由は、養蜂作業が大変とする答えが半数あったが、一方で高齢やハチアレルギーになったために養蜂をあきらめていた場合が 2 割あった。伝統的養蜂が継続されるためには、自然に関わる生業が成り立つこと、地域の中にある程度の養蜂者人口がおり、養蜂に関する社会的な繋がりが保たれることが必要であることが示唆された。

キーワード : 集落間比較、ゴーラ、地域社会、蜂蜜、文化

2015 年 2 月 16 日受付, Received February 16, 2015

2016 年 4 月 8 日受理, Accepted April 8, 2016

1. 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション
Forest Research Station, Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University
*agetsuma@fsc.hokudai.ac.jp
2. 元 北海道大学地球環境科学研究所
Faculty of Environmental Earth Science, Hokkaido University
現 公益財団法人 山階鳥類研究所
Yamashina Institute for Ornithology
3. Waku Doki サイエンス工房
Waku Diki Science Planning